

新中川人道橋バイク通行禁止



この橋の存在は多くの方がご存知だと思いますが、「新中川人道橋」という橋の名前や、この橋を人が歩いて渡れるという事実は意外と知られていないかもしれません。かくいう私も、つい最近まで知りませんでした。



丸いパイプ部分は水管です。新三郷浄水場で浄水処理された水道水を、越谷・草加・川口方面に送るためのものです。

水管の上に人道橋が設置され、幅は1.5m。自転車2台がちょうどすれ違うことができる程度の広さです。階段の登り口の少し奥手に、「この道路は自転車歩行者専用道路です。自転車で通行

される方は登り下りは危険ですので、自転車をおりて通行してください。バイクの通行は禁止します。台風時は閉鎖します」と、吉川市役所と吉川警察署の連名で注意喚起しています。

この橋で6年前の12月のある夜、ひとりの市民が交通事故に遭いました。その方は自転車を押しながら下を向いて歩いていたところ、急にバイクのライトが眩しく光り、目が眩んだところをひき逃げされたというお話です。3カ月の入院治療を余儀なくされ、外傷性てんかんという深刻な後遺症も残り、今も苦しんでいます。犯人は未だに捕まっています。

この方から、「バイク通行禁止」という看板を大きく目立つように設置してほしいという要望が市に出されました。市もその願いにこたえ、近々看板が設置されることになり、今準備が進められています。

この橋は越谷・草加方面に通う高校生にとっても、とても重要な通学路になっています。ひとりの市民の勇氣ある声で、安全対策が強化されるということをととても嬉しく思います。声をあげることの大切さを、改めて思います。



◆先月、母を岐阜から吉川に連れてきました。前回も書きましたが、使い慣れた方言で話ができる地で最期まで暮らしたいというのが母の願いでした。90歳を過ぎて、若いころの柔軟な適応力を無くした母を本当に連れてきて良いのか、散々悩んだ挙句の決定でした。◆ところが、近隣の高齢者施設に入所させて間もなく、連れてきて本当に良かったと思うことがありました。急変して救急搬送され、入院した病院で狭心症と診断されたのでした。冠動脈の1本は90%、もう1本はそれ以上に詰まっていたことがわかりました。血管を広げる処置をしていただき、危うくのところで命が繋がりました。◆施設で嘔吐した後意識レベルがダウンし救急搬送と判断されたのですが、救急車が到着したときにはもう既に意識も回復していたそうです。もしこれが遠く離れた岐阜の施設から「どうしますか?」という電話だったら、私は躊躇わずにそのまま様子を見てくださいとお願ひするところでした。近いから、自分もすぐに駆け付けられるからこそ搬送に同意することができたように思います。◆今まで、住み慣れた地で最期まで過ごせることが、高齢者にとって一番幸せだとおもっていました。でも、パッと動ける子どものそばで最期の時間を過ごすことも、もしかしたら安心につながるのかもしれませんが。そんなことに気づかされたエピソードでした。連れてきて、良かったです。



雪田きよみ

きよみの暮らし

つわぶき便り

日本共産党吉川市議会議員
雪田 きよみ
住所：吉川市きよみ野 3-23-1
電話：983-7140
e-mail:kiyomi.snow@mbr.nifty.com
URL:kiyomiyukita.com

認知症高齢者の見守り体制の強化を

今年の3月議会に引き続き、9月議会一般質問で取り組んだのは、認知症高齢者の徘徊の問題でした。

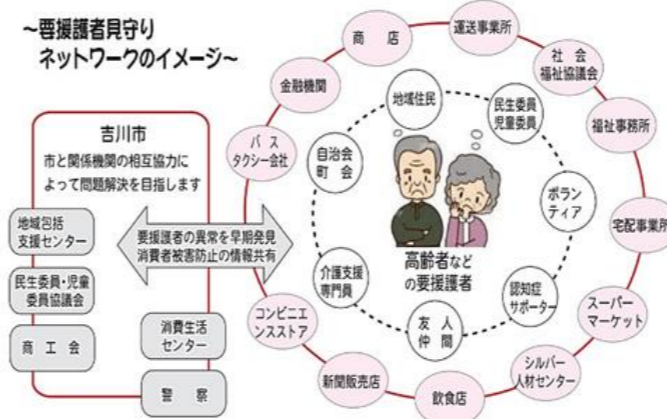
行方不明認知症高齢者の死亡率は約3%

2019年の認知症に関わる行方不明者は全国で1万7479人。統計を取り始めた12年の1.8倍となり、7年連続で過去最多を更新しています。

行方不明者のうち508名が亡くなった状態で発見されています。死亡率で考えると、約3%。コロナウイルスの死亡率は約1%、行方不明者の死亡率は決して侮れるものではありません。しっかりと対策が求められています。

死亡事故を防ぐカギは、早期発見です。

要援護者見守りネットワークとは



高齢者や障がい者など、援護を必要とする方々が住み慣れた地域で安心して日常生活が営めるように、要援護者の異常に気づき、事故や事件等に巻き込まれることのないように、地域での緩やかな見守りを行うためのネットワークが、「要援護者見守りネットワーク」です。この中には、もちろん認知症高齢者の徘徊も含まれています。

市のシステムの見直しを

今年1月末の冷たい雨が降るある日の夕方、ひとりの認知症高齢者の方が行方不明になりました。ご家族は警察に連絡しましたが、防災無線放送も安全安心メールも流れず、見守りネットワークにも連絡されず、その方が発見されたのは翌日の午前2時でした。その時たまたまご自宅の電話番号をコンビニのスタッフに伝えることができ、発見されました。

差して出た傘と発見時に持っていた傘が違うことから、その方が助けを求めていくつかの店舗に立ち寄っていたことが推察されました。

もし適切に見守りネットワークに連絡が届いていたら、コンビニ等のスタッフに注意喚起ができ、もっと早く発見できたのではないのでしょうか。

リスクの高い高齢者の事前登録を

吉川市のシステムはまず警察に通報し、警察と市がやり取りをした後、ようやく防災無線・安全安心メールや見守りネットワークに繋がる形です。平日の昼間ならこの方法でも特に問題はありませんが、夜間や土日祝祭日などは警察とのやり取りに手間取り、時間制限（防災無線は夜8時まで、安全安心メールは夜10時まで）もあり、上記のように対処されない事例が発生しています。

三郷市など多くの自治体で取り組んでいるのは「事前登録制」です。徘徊リスクの高い方を事前に登録し、いざというとき警察を介さずに防災無線放送や見守りネットワークに繋げるのです。

吉川市でも「事前登録制」にして無駄な時間を省き、少しでも早く発見されるような仕組みをつくるべきだと思います。子ども福祉部長は「これが十分と思っているわけではない。高齢部門とも今後話をしていながら、できるだけこの事業が良い形で活用されるよう取り組んでいきたい」と答弁しました。

今後の見直しに期待したいと思います。

ジェンダー平等社会の実現を

10月31日に行われた衆議院選挙、日本共産党・立憲民主党・社民党・れいわ新選組の4野党は政権交代をかけて取り組みました。が、自公政権が維持されることとなり、本当に残念です。しかし政治が今のままで良いと思っている方は、決して多くはないと感じます。格差と貧困のない社会、未来に明るい希望が抱ける社会へと、政治を変えていきたいと思えます。変えるべき大きな課題の一つが「ジェンダー」だと思えます。

『ジェンダー平等社会』って？



「ジェンダー」とは生物学的な性別に対して、社会的・文化的につくられる性別のことを指します。世の中の男性と女性の役割の違いによって生まれる性別のことです。

「男だから・女だから」「男のくせに・女のくせに」「男らしく・女らしく」。こうした言葉に代表される差別と不平等をなくし、誰もが自分らしく生きられる社会をつくらうというのが、ジェンダー平等の基本的な考え方です。

思い込まされてきた男女の役割

昨年11月9日、NATIONAL GEOGRAPHICは『9000年前に女性ハンター、「男は狩り、女は採集」覆す発見』と題した記事を報道しました。

2018年、アンデス山脈で発掘された約9000年前の墓の中には成人のものと思われる骨とともに、多種多様で見事な狩猟用の石器がありました。大きな獲物を倒し、その皮をはぐ作業までの道具がそろっていました。「彼はきつと優れたハンターで、集団の中でとても重要な人物だったにちがいない」と研究者たちは考えました。

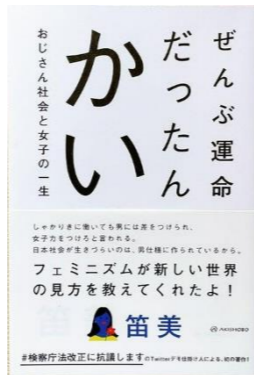
しかし人骨は、女性のものでした。更に昨年11月4日付けの学術誌「Science Advances」には、当時の南北米大陸では女性のハンターは例外的な存在ではなかったとの論文を発表しました。

その後、米大陸全域で発掘された同時代の墓の調査結果を見直し、大型動物ハンターの30~50%が女性だった可能性が明らかになったとの記事でした。

「男は狩猟、女は採集」が決して人間本来の姿ではないことが、科学の力で明らかになりました。

人間が人間らしく生きられる国

フェミニストの笛美さんの著書『ぜんぶ運命だったかい おじさん社会と女子の一生』(AKISHOBOU)を読みました。笛美さんが数カ月F国に滞在する中で、フェミニズムに目覚めていく過程を描いたエッセイです。



F国ではバスやトラックの運転手として働く女性も多く、夕方のスーパーには子連れのお父さんたちが溢れかえっている。子どもとのサッカーの約束の為に、男性が定時で退社する。男性も自分で作った簡単な弁当を持って出勤する。誰かと親しくなるために、「モテない女」と自虐ネタを使う必要もない。子どもは産んでも良いし、産まなくても良い。ただし産むならお金のことは心配しないで、そんなメッセージのある国。

F国の方が日本より圧倒的に生きやすい。そう気づいた笛美さんは次第にフェミニストに、そして政治を考える人へと変わっていきました。

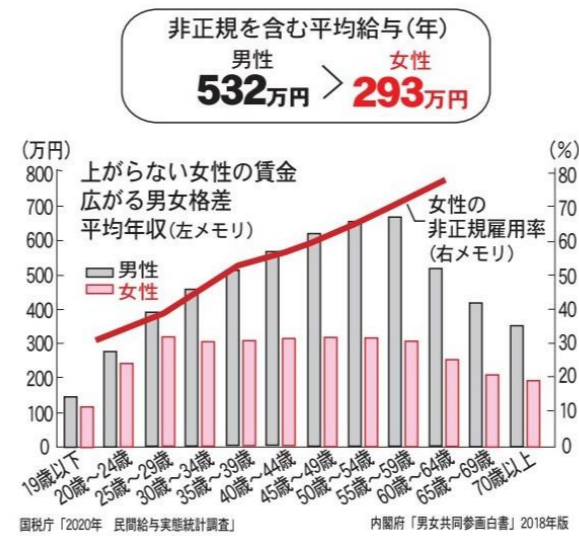
日本はジェンダーギャップ後進国

今年の日本のジェンダーギャップ指数は世界156カ国の中で120位、昨年は世界153カ国中120位です。

1~3位は北欧諸国、韓国102位、中国107位、ミャンマーでも109位と日本よりも上位です。特に経済分野115位、政治分野144位と世界最低レベルです。先進国でありながら、ジェンダーギャップについては大変な後進国、日本です。



深刻な男女の賃金格差の是正を



特に賃金格差は、生涯で1億円にも上ると言われています。この賃金格差がシングルマザーや夫亡きあとの高齢女性の貧困に繋がっています。

日本共産党は、以下の提案をしています。

- ◆ 企業に男女別賃金の公表を義務付ける
 - ◆ 女性が多いケア労働者の給与アップ
 - ◆ 非正規から正社員への流れをつくる
- こういう不合理な格差を正して、誰もが生きやすい社会にしていきたいですね。

高齢者は唾液が出にくい！ ~高齢者施設のPCR検査~



今年4月から、埼玉県では高齢者施設の職員と新規入所者に対しPCR検査を実施しています。当初は県内の12自治体に限って実施すると計画されていた検査を、私たち日本共産党吉川市議員団からも働きかけ、吉川市議会として全県で実施するよう要望し実現した検査です。同日、吉川市も県に同様の要望を提出しました。

その検査が、今も引き続き実施されています。ただし高齢者に実施されているのは唾液検査です。そして本当に残念なことに、高齢者は唾液が出にくいという現実があります。認知症高齢者ならなお、唾液を出していただくのは非常に困難です。

こうした状況を、高齢者施設の方から直接お問い合わせの機会がありました。その施設では独自に咽頭検査を実施しているようですが、月に5~6人の新規入所者を迎えると7万円程度の出費となるそうです。元々経営が厳しい高齢者施設にとっては、厳しい出費です。

私はすぐに日本共産党埼玉県議団に連絡し、咽頭検査に変更するよう要望していただきました。また、吉川市の9月議会では、独自に咽頭検査を実施している事業所に対し、県から支払われる金額との差額を補助するよう要望しました。しかし市の答弁は、検査の目的は感染者の発見による感染拡大の防止・クラスター発生の予防、高齢者施設の職員・入所者のワクチン接種は概ね終了しており、今の体制でクラスター発生予防という目的は達成されていると、非常に後ろ向きな答弁でした。



2回のワクチン接種が終了しても、感染した事例は多々あります。また議会終了後間もなくして、ワクチン接種が終了したはずの高齢者施設でのクラスター発生の報道もありました。接種が終了しても県が検査を続けているのは、感染リスクを否定できないからではないのでしょうか。そしてまた、高齢者施設はクラスター発生を予防するだけではなく、入所者一人一人の命を守るためにこのような対応をしているのだと思います。職員が守っているのは、高齢者の命です。

まだ新型コロナウイルス対応地方創生臨時交付金が3千数百万円残っています。市民の命を守るためにこそ、使うべきお金ではないでしょうか。

生活相談
いつでも、どんなことでも、気軽にお電話ください。
983-7140